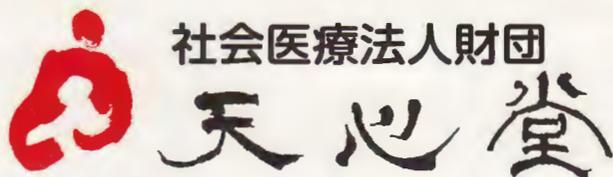


がんごの 赤ひげ



目次 contents

- P1 創立35周年を迎えて
- P2~P4 診療部門の現在と今後の展望
- P5 医療機関における省エネ対策の必要性
- P6 第22回天心堂健康まつりを終えて
ぶらり戸次 帆足本家「富春館」を訪ねて
- P7 第3回 ちょっとそこまで、大南散歩。
芥川賞受賞作の舞台、竹中 中冬田



【天心堂の医療目標】 良質にして包括的な保健・医療・福祉を地域に提供する そして100年を超えて生きつづける医療を実践する

創立35周年を迎えて

社会医療法人財団 天心堂 理事長 まつもと たいすけ 松本 泰祐

皆さん今日は、天心堂はようやく35周年を迎えました。これも皆さま方のご協力、ご支援の賜物と感謝致しています。職員一同に代り御礼申し上げます。

さて、今回の創立記念日は天心堂にとって、良い節目の日となりました。

第一部

私は自分が理解している現状の社会保障制度について話させていただきました。

年金は現役世代の保険料から賄われる賦課制度である事、少子高齢社会での医療費の問題、子育て支援の重要性、介護の2025年問題、財政赤字1,003兆円での社会保障費の財源問題、これら全てが若い皆さん方の双肩に懸かっ

ている事、そして高齢者の協力も必要な事、これらの問題解決には政治や経済(経世済民)に関心を持ち、関係していかなばならないと話したつもりです。

第二部

しかし、今回、ご紹介する“へつぎ病院”の先生方の「今後の医療展開」についての講演が素晴らしく、心が晴れる気持ちで聞き入ってしまいました。

2015年 9月 1日 創立35周年は“へつぎ病院”の世代交代を実感させる記念すべき良き日となりました。嘉辰令月とはこの時を言うぞ、めでたき。

どうか我が“へつぎ病院”の若き医師(獅子)達の抱負をお聞き下さい。



診療部門の現在と今後の展望

院長・座長 へつぎ病院 院長 安田 一弘

本日はへつぎ病院の各科の医師にそれぞれの科の現状と今後の展開を発表していただきました。いずれの診療科も年々体制が充実し、業績を伸ばしていることを理解していただけたと思います。病院の総括としては、ひと月あたりの新規入院患者数が2年前に比べて約30名増え、一日当たりの入院患者数も10名増加しており、病院経営も安定しています。

へつぎ病院の来年度に向けての展開は、①心臓カテーテル検査・治療の導入、②消化器病センターの設立、③ハイケアユニットの設置、④薬剤部の充実、⑤教育ネットなどです。多職種精鋭によるチーム医療を進め、より質の高い安全な医療を提供していきたいと思えます。



眼科 眼科部長 原 恵美

外来センターでは、結膜炎などの前眼部疾患、白内障、ぶどう膜炎などの中間透光体疾患、糖尿病、高血圧に合併する網膜症や加齢黄斑変性などの眼底疾患の診察処置を行っており、病院においては白内障、翼状片、老人性眼瞼下垂の手術適応患者の入院加療中心となります。外来患者数は10年前と比較して現状傾向にあります。最新の診断機器、手術機器の導入により早期診断や現状の把握はより進歩し、手術適応も拡大しています。白内障手術は年間約100例ほど行っておりますが、ここ数年は紹介患者が増加し、患者全体の約3割を占めるようになりました。

今後も他科との連携による①外来新患及び手術件数の増加、②外来に於ける最新検査機器の充実とスタッフのスキルアップ、③紹介患者の維持と拡大を目指していきます。



循環器内科 循環器内科・睡眠時無呼吸センター 循環器内科部長 河野 嘉之

本年4月より循環器内科、睡眠時無呼吸センターを立ち上げ、常勤医師2名が着任しました。主要検査として、冠動脈320列マルチスライスCT、経胸壁・経食道心臓超音波検査、頸動脈超音波検査、ABI/PWV(下肢の血管のつまりの程度や血管年齢を推定します)、血管内皮機能検査、終夜睡眠ポリグラフが施行可能です。心不全、不整脈、生活習慣病(高血圧症、脂質異常症、糖尿病)、睡眠時無呼吸症候群等を主な対象疾患として診療にあたります。

今後の展開として、県内でも数少ない高性能の冠動脈マルチスライスCTを更に活用し、10月に導入した心臓血管カテーテル検査に繋げ、患者さんの疾患に対する早期確定診断及び治療に取り組みたいと思えます。



呼吸器内科 呼吸器内科部長 大瀧 稔

2011年11月着任し、本年4月より常勤医師2名体制になりました。日本の肺炎による死亡率は2000年あたりより年々増加傾向にあり、肺炎による死亡者のうち96.5%は65才以上の方です。これまでへつぎ病院で取り組んだ主な肺炎は、誤嚥性肺炎、細菌性肺炎、間質性肺炎が中心ですが、元々の基礎疾患に伴う合併症の肺炎が主体となります。

今後の展望として、今後更に高齢者の肺炎が増加して行く中で、他の施設からの紹介なども含め肺炎治療のニーズは高いと思われます。昨年12月には日本呼吸器学会の関連施設の認定を取得しました。今後も各種専門医取得に必要な研修施設認定を受ける事で、呼吸器内科医師の増員などにも貢献したいと思えます。



消化器内科 消化器内科部長・内視鏡センター長 宮島 一

2012年10月で新しく内視鏡センターを開設して3年が経過しました。先端内視鏡機材を装備し、また内視鏡機材を天井から吊り下げることにより広い検査スペースを確保し、あらゆる内視鏡検査・治療に対応してきたことで天心堂の健診・健康増進センターの健診胃カメラを中心に、病院・診療所患者数が増え、また治療内視鏡件数が増えています。鎮静剤使用後のリクライニングシートでの安静や大腸内視鏡検査前処置のための男女別の控え室があり、内視鏡検査前後の不安や緊張を取り除き、当初患者中心の構想通りに十分に機能していると思われま

す。今後の展開として、内視鏡検査に加えて消化器外科・内科診療を行う消化器病センターの構想もあり、新たな展開が始まる予定です。



泌尿器科 泌尿器科部長 元森 照夫

へつぎ病院は泌尿器科学会の教育関連施設となっており、個人では泌尿器科学会専門医・指導医をはじめ透析医学会、化学療法学会等の専門医及び認定医を所持しています。専門は泌尿器科ですが最近、感染症と認知症を積極的に勉強中です。現在泌尿器科は1名体制で、外来は過去2年の月平均で220名、入院は2013年度月平均で161名、2014年は187名と徐々に増加傾向にあり、中心的手術は体外衝撃波と内視鏡的手術です。

今後の目標の一つとして、へつぎ診療所で午後総合診療を行い、泌尿器科疾患患者の発見と啓蒙を行っています。また、出かける医療として往診業務を開始しました。加えて他院との連携強化を行い新規患者の増加を目指します。また地域での健康講座や勉強会で泌尿器科疾患・感染症・認知症の啓蒙を行いたいと思います。

20世紀は病院で病気を治す時代でしたが、21世紀は自分で病気を予防する、病院はそれをアドバイス、管理する時代だと考えます。皆様方もいつまでも健康でいられるように、今一度ご自身や家族の体・生活状況・健康状態などを考えてみてください。その上で我々がご協力できることは精一杯やらせていただきますので、遠慮なくご相談ください。



脳神経外科 副院長 脳神経外科部長 河村 忠雄

脳神経外科が担当する領域は、脳血管障害、脳腫瘍、脊椎脊髄、先天奇形などの小児脳神経外科、てんかんなどの機能的脳神経外科、頭部外傷、炎症性疾患など非常に幅広く多岐にわたります。さらにその診断から術後などの安定期の管理まで対応しています。当院では担当医師数の面からも前述の疾患すべてを網羅し対応することは適いませんが、当院へ関わったすべての方々に納得してもらえるように可能な限り尽力したいと思っています。

神経医学は精神医学と混同する人もまだまだ多く、区別がつかないわからない人も多いと思いますが、悩み続けるよりも当院脳神経外科を受診してみることをお勧めします。

当院には320列CTや1.5TのMRIがあり、急性期脳卒中や頭部外傷に対しCTやMRによる画像検査で脳の形態的問題を抽出し、早期にリハビリテーションを開始する際の回復予測を含めて治療に役立てています。なお脳神経外科では対応していませんが、アルツハイマー病の画像診断の一つであるVSRADも撮像可能です。当院脳神経外科では対応出来ない病態であっても、適切な診療科や施設へ迅速に紹介しています。

脳は人間にとって最も重要な臓器の一つです。脳の機能を脅かす様々な疾病や外傷から一人でも多くの方を助けるべく常に全力を尽くす所存にございます。最先端の診断

や治療を地域の皆様方に提供出来るよう日々努力してまいります。皆様の更なるご指導ご鞭撻を何卒宜しくお願い申し上げます。



外科 外科部長 川崎 貴秀

当科では科学的根拠に基づいて診断から治療まで一貫した診療を行っています。まず検査では320列MDCTによる高精度なCT検査と大分大学放射線科と連携した正確な診断を提供します。その検査結果を元に、消化器内科との合同画像カンファレンスにより治療方針を検討しています。手術が必要になった場合は体への負担の少ない高度な腹腔鏡下手術を導入しています。術後の万が一の再発に対しても、標準的な化学療法が行える体制を取っています。また、人生の終末期においても緩和ケア病棟における質の高いサポートを行うことができます。入院中は毎朝の回診、週1回のチーム回診を実施し、患者さんひとりひとりに最適な食事指導や退院後のサポート体制の確立に取り組んでいます。常勤医師2名体制になり3年目を迎えますが、1日当たりの入院患者数は順調に増加し、2015年度の3ヶ月では平均が19名になりました。手術症例数も増加しており、8月末時点で93例、今年度は150例を見込んでいます。



腎臓内科 腎臓内科部長・透析センター長 岩下 智彦

腎臓内科・透析センターは、健診で検尿異常や腎機能障害を指摘された方の二次精査を始め、慢性腎炎やネフローゼ症候群の診断やステロイド・免疫抑制剤による治療、糖尿病性腎症や慢性腎不全に対する保存的治療、末期腎不全に対する血液透析の導入や維持管理、急性腎不全に対する緊急透析や重症患者に対する血漿交換・吸着療法などを行っています。また慢性腎臓病(CKD)患者が全国で1300万人存在すると言われ、依然として透析患者も増加傾向にあるため、健診センターを併設する天心堂では、早期発見から治療及び管理まで2人の腎臓内科専門医が診療に従事しています(大分県内の腎臓内科専門医は現在35名)

今後の展開としては①さらなる広報活動、②二次検診率の向上を掲げたいと思います。



糖尿病・内分泌内科 内分糖尿尿病内科部長・糖尿病内分泌代謝センター長 局 哲夫

当科では、糖尿病、脂質異常症、高血圧、内分泌疾患の治療を行っています。主な治療法は、食事療法、運動療法、薬物療法で、患者様一人一人の病態に合った最新最良の治療を提供しています。糖尿病の三大合併症、動脈硬化や血管病変、癌を早期発見できる合併症の予防・早期治療できる体制を整えており、あらゆる職種のスタッフがチームで専門医療を提供しています。また、糖尿病療養指導士の資格を持つ医療スタッフが病院、診療所に常駐しており、患者さんのご相談に応じることが可能です。

今後も患者さんのQOLとそれぞれの人生における夢や目標を達成いただくために、最適な治療を患者さんと共に考え、地域医療に取り組んでいきたいと思ひます。

医療機関における省エネ対策の必要性

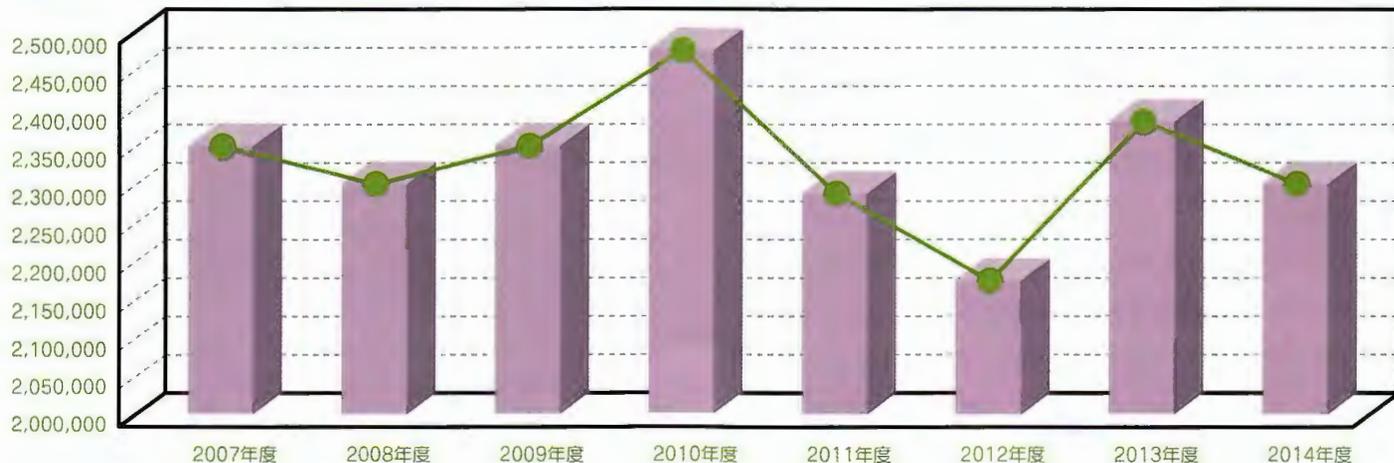
社会医療法人財団 天心堂 本部施設課 課長 赤峰 俊里

異常気象や温暖化現象を目の当たりにしている昨今、「環境保護」を産業の視点で見た場合医療機関も高エネルギー事業といえます。24時間稼動する病棟や救急受け入れのために多くのエネルギーを排出している。もちろん医療機関は、患者さんの命を預かる場所であるため、エネルギー使用

量が第一義とはならないが、無駄なエネルギーを極力抑えるという使命は、医療機関にとっても重要なことであり、コスト削減につながることも多く、積極的に取り組むべき課題といえます。天心堂としても、これまでに様々な省エネ対策を実践してきました。具体的な対策例を紹介します。



図1 へつぎ病院 年度別電力使用量推移



へつぎ病院の年度別電力使用量は、図1のようになる。この間、リハビリセンター増築工事、透析センター移設工事、内視鏡センター移設工事、緩和ケア病棟新設工事など、電力使用量の増加要因となる設備改善を実施してきたが、2007年度を基準に検証した結果、気象条件の影響で一時的に増加した年度を除けば、省エネ効果は表れているものと判断できる。

今後の取り組み

病院はサービス業でもあるので、省エネにより患者さんの療養環境を悪化させることは避けなければならない。省エネを推進していくには、職員が団結し、小さなことからでも取り組んでいくことが重要である。

組織全体で取り組みを強化し、職員の意識改革とさらなる設備改善(緑化推進・LED照明・太陽光発電)を行い、省エネ推進による社会貢献とコスト削減に取り組んでいきたい。

第22回天心堂健康まつりを終えて

第22回天心堂健康まつり運営委員長 へつぎ診療所事務長代行 今村 浩司

2015年5月24日(日)第22回天心堂健康まつりを開催しました。

天心堂健康まつりは当法人の毎年1回の恒例行事で、「地域の方々へもっと天心堂を知って頂きたい、もっと気軽に天心堂に立ち寄って頂きたい、もっと健康に関心を持って頂きたい、そこでなんらかの形でお役に立ちたい」というコンセプトをもとに今回は「地域まるごとラッピングー地域を包む予防・医療・介護の輪」をテーマとして、今年4月に新設されたばかりの天心堂有料老人ホーム光風苑前のスペースで開催しました。

天候不順の時期でしたが当日はまさかの晴天に恵まれ、文字通り暑い暑い一日となりました。ステージイベント、フロアイベント、出店全てにおいて大盛況のうちに事故等も



なく終える事ができました。非常に短期の準備期間の中、運営委員・実行委員のご尽力、またご参加頂いた皆様のおかげだと心より感謝申し上げます。

ぶらり戸次

戸次は古くから交通の要衝で、歴史的建築物が今も点在しています

帆足本家「富春館」を訪ねて

文人墨客に愛された自由さをそのままに。 現代のサロン 帆足本家富春館



帆足本家はおよそ4百年前、大分県玖珠郡より戸次に移り、江戸時代には、臼杵藩の庄屋となり酒造業を営みました。母屋は武家構えの特徴をもち、館号「富春」は頼山陽により揮毫されたそうです。帆足家は豊後南画の大家、田能村竹田などとも親交を深め、富春館は多くの文人画を楽しむ自由人たちのサロンになりました。

現在は往時の状態で保存され、国の指定文化財となつ

た居住空間を開放。敷地内には母屋・蔵はカフェ、レストラン、ギャラリー、地産の味を楽しめるお店、菓子処などがあり、帆足家に伝わる家具、調度品などを用いたしつらいで古き良き時代を満喫できます。酒蔵(大分市有形文化財)では、当時の酒造りの様子を自由に見学ができます。お食事を楽しみながら当時の空間を味わってみてはいかがでしょうか。次回は富春館の各建物とお店の内容紹介も致します。



TEL 097-7761 大分県大分市中戸次4381 新設本館営業
TEL 097-597-0002(代表) 営業時間 10:00~17:00 定休日 月曜日(祝祭日の場合は翌日)
HP <http://www.hoashi-honke.com> お問い合わせ 帆足本家 事務長 今村 浩司

第3回

ちょっとそこまで、大南散歩。

芥川賞受賞作の舞台、 竹中 中冬田



天心堂へつき病院 医療福祉相談室 課長 天野誠司

今年2月25日、新聞の投稿欄に「伊東中将に脚光期待」と題した一文がありました。私の目に止まったのは筆者の「三浦幸三」さんのお名前でした。大南地区文化財同好会刊「落穂」に多くの研究を掲載しておられ、面識は頂けてないのですが地誌で最も権威のあるお一人です。早速拝読すると「…47年前「徳山道助の帰郷」で芥川賞を受けたのは柏原兵三。陸軍中将だった祖父の伊東政喜をモデルに書き上げた作品だ。…伊東は現在の大分市竹中の中冬田地区出身で、実家に帰省した際は住民がちょうちん行列で歓迎したと祖母に聞かされた。…」との内容。中冬田と言えば「大分丘の上病院」のすぐお隣に当たる地区。そこから陸軍中将が出ているとは。早々に小説「徳山道助の帰郷」を購入。一読することにしました。

貧しい農家の長男に生まれた主人公は小学生から神童と呼ばれ、中学の特待生から士官学校へ。日露戦争、第一次大戦を経て陸軍内で砲術の権威と目される様になり中将にまで昇進する。師団長として赴いた上海で生死の境を彷徨う重傷を負って内地へ。戦時下のマスコミに取り上げられて国民的英雄になる。療養生活を送るうちに迎えた終戦。明治生まれの謹厳実直な退役将官にとっては、経済的にも精神的にも苦難の時代となる。軍人恩給の一時停止、心の通わない妻との生活、見下していた弟の経済界での意外な出世。時代に流

され、忘れられてゆく74歳の老人に望郷の想いが兆した時、母親の三十三回忌の法要の報せが大分から届く。帰ろうか、帰るまいか。嘗ての現役時代の様な華々しい帰郷では無い。ただ、年齢的にも最後の帰郷となろう。故郷に自分の墓も建てたい。微妙に揺れ動く気持ちを抱えて、遂に生家へ。姉弟、親類縁者、大野川、九六位山。故郷の人と山河に暖かく迎えられて最後の帰郷は果たされる。

50年も前の芥川賞受賞作の舞台が竹中とは知りませんでした。実際、地元の方に教えて頂いて訪れてみたのですが、「伊東政喜中将」のお墓は、中冬田の西を向いた丘の上にあります。

「徳山道助の帰郷」、是非ご一読を。

